



## 機械学会東海が名大で総会 企業にアピールし参加促す

日本機械学会の東海支部は3月12日～14日の3日間、名古屋大学(名大)東山キャンパスで総会と研究発表などを合わせた「TOKAI ENGINEERING COMPLEX 2018(TEC18)」を開催した。講演会や学生会員の卒業発表だけでなく、名大施設の見学会が組まれるなど、一般参加者の動員にも力を入れた。「学校だけでなく、企業の人たちにも有益な情報を発信する場として認識してほしい」と前東海支部長の酒井康彦名古屋大学教授は話す。

### 工学系の技術講演会320件

日本機械学会東海支部が毎年開催する総合イベントTECは、支部の研究発表と学生会員による卒業発表の2種類の講演で構成され、それぞれ70年、50年近く続く工学系の学術講演会だ。今年は合わせて約320件の研究成果を発表。全体で約650人が足を運んだ。

講演内容はさまざまな項目に分かれ、自動車技術や機械加工、熱工学などがある。研究報告や問題提示、事例報告を発表した。また、生産財の今後のトレンド、製品や素材を紹介。それらに必要となる技術なども会場で見られた。



特別企画では次世代型電動車いすを体験

多くの人が講演に参加したが課題もある。それは「地元企業からの参加」(酒井教授)という。「TECの参加者は、学校の教員や学生が多い。企業からの認知度はまだ低く、大学を卒業すると学会から離れる傾向がある。発表する研究内容が企業にとって役立つことをアピールして、学会に行けば新しい情報が知れると思ってほしい」と話す。

### 幅広い参加者の動員へ

学術講演会は有料だが、無料で参加できる特別企画と見学会もある。

特別企画では「未来の社会をどうする!」と題した講演会を開催。名大の卒業生で、次世代型電動車いすを製造販売するベンチャー企業WHILL(ウィル)の福岡宗明最高技術責任者(CTO)が、ベンチャー立ち上げの苦勞、電動車いすの活用について話した。会



「来て、見れば分かる。そんな学会にしたい」と酒井康彦教授

場には学校関連だけでなく、工作機械や自動車産業から150人以上が足を運んだ。その後の同社が開発した電動車いすの体験会では、多くの参加者が搭乗し、また構造に注目した。

見学会は、企業と大学の共同開発を進めるナショナル・イノベーション・コンプレックス(NIC)や最先端の減災研究を進める減災連携研究センター、熱可塑性炭素繊維強化プラスチック(CFRP)などを研究するナショナルコンポジットセンター(NCC)の3拠点を見学できる。「名大施設の3拠点が同時に公開されたのは初めてのこと」と酒井教授は強調する。

### 2020年に向けて

東海支部にとって今年のTEC

は「特に力を入れた」という。それは、2020年に名大での開催が予定される日本機械学会の年次総会の前哨戦でもあるからだ。年次総会には全国から研究が集まる。前回、10年に愛知で開催した時は1300件以上の研究が発表さ

れ、2800人が参加した。

TEC18で実現した名大施設3拠点の見学会は、20年にも開催する考えだ。今回の取り組みを踏まえ、さらに学校や企業の活動を一般の参加者にも分かってもらう機会を作るといふ。

「2020年は、今年以上の規模になる。TEC18をモデルケースにして、参加した人に『ものづくりの都市』を改めて実感できるようなイベントにしたい」と酒井教授は力を込める。

(渡部隆寛)